

東日本大震災記録集

ふくしまの絆Ⅱ

ふくしまの絆Ⅱ

〜輝く未来へ〜



福島県小学校長会

夢に向かって





未来を担う





輝く未来へ





未来を築く





福島の明るい未来を担う心豊かで たくましい子どもたちのために

福島県小学校長会

会長(当時) 福 士 寛 樹

2011年3月11日、午後2時46分、マグニチュード9.0、最大震度6強の未曾有の大地震が私たちを襲いました。沿岸部の浜通りでは、大地震による最大21mもの大津波が襲い、沿岸部の住宅や田畑など全てのものを飲み込み、多くの方々が亡くなりました。その後、大津波により電源を喪失した福島第一原子力発電所事故により、大量の放射性物質が放出され、ふるさとを離れ、県内外での生活を余儀なくされる方々が大勢でした。また、各学校においては、放射線の影響により屋外活動を制限するなど児童生徒の安全・安心を最優先にした教育活動を再開しました。

この間、県内外の関係の皆様から多大なる物心両面の温かいご支援を頂戴し、教育活動の再開や教育環境の回復、復興のために使わせていただきました。関係の皆様にご心より御礼を申し上げます。

月日のたつのは早いもので、あれから6年目が過ぎようとしています。除染も進み、県内外に避難された方々も次第に戻られ、県内の多くの小学校においては、震災前の活気を取り戻しつつあります。しかしながら、未だに4小学校が臨時休業中、19の小学校がふるさとを離れ県内の他市町村で廃校施設や企業施設、仮設校舎等で児童数の激減の中、教育活動を再開しています。スクールバスにより長時間揺られて登下校する児童、PTAを組織できない学校、ふるさとのことを知らない子どもたちが学習する「ふるさと創造学」の実施など様々な課題に正面から向き合いながら教育活動を進めています。各市町村は、今後の帰還に向けたロードマップに基づき様々な活動を進めています。

今年度、福島第一原子力発電所の視察に出かけました。6000人もの方々がマスクを着用して黙々と廃炉作業に一生懸命取り組んでおられる姿が印象的でした。しかしながら、現在は、炉心溶融をおこした核燃料「デブリ」の取り出しや建屋内の汚染水対策と地下水対策、そして原子力発電所事故の風化をいかに防ぐかが大きな課題になっています。廃炉まで40年の歳月がかかるといわれています。

この廃炉作業が終わり、避難されている方々が自分のふるさとに戻り、震災前の幸せな生活を取り戻すとき、そのときが復興の終焉であるにとらえています。一日も早くそのときが来ることを願っています。

このような中、子どもたちを取り巻く学校教育課題はさらに山積しています。例えば、学力の低迷、体力・運動能力の低下、心のケアの問題、いじめ、不登校の増加等の生徒指導上の問題などです。国の動きに目を転じますと次期学習指導要領の大綱が中教審に大筋了承され、主体的、対話的、協働的な学びのアクティブ・ラーニングを授業改善の視点としたものとなっています。また、本県においては、大量退職時代を迎え、学校力の維持・向上や教員文化の継承なども課題の一つとなっています。

私たち小学校長会は、このような課題に対しても、万里一空の気概をもって着実な改善・解決を目指し、復興の歩みを続けていかなければなりません。もちろん、東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所事故を決して風化させてはいけません。

このたび「東日本大震災記録集 ふくしまの絆Ⅱ」を発刊いたします。第一集は、東日本大震災や福島第一原子力発電所事故にかかる「あの日の出来事」についての内容が多く載せてあります。お届けする第二集は、東日本大震災後五年数か月の間に頑張ってきた子どもたちの作文や、教員たちが福島未来を担う子どもたちに送るエールや、子どもたちが描く夢や希望の後押しをするメッセージが数多く載せられており、私たちが今後どう生きるかといった未来志向の内容といたしました。作文を書いていた子どもたち、お忙しい中、原稿をお寄せいただいた先生方をはじめ関係の皆様、そして座談会にご出席いただき当時の状況や対応等についてお話しいただいた皆様にご心より御礼申し上げます。

この記録集を手にした皆様には、未曾有の東日本大震災とレベル7ともいわれる福島第一原子力発電所事故を経験した私たちからのメッセージ、資料としてお読みいただくとともに、ぜひ後世に、後輩たちに語り継ぎ、今後の防災、減災にかかる教育諸活動、特に防災(減災)教育、放射線教育、安全教育の一助になりますことを、さらには明るい未来に向かう活力となりますことを願っております。

結びに、私たち福島県小学校長会は、「学校は、復興の最大の拠点」という認識のもと、本県の未来を担う子どもたちのため、会員の心をつなげて、学校教育課題の着実な改善・解決に真摯に取り組むとともに、関係の皆様と手を取り合いながら「チームふくしま」の一員として復興の歩みを続け、引き続き粘り強く心豊かでたくましい子どもたちを育ててまいりますこととお誓い申し上げ、発刊に当たってのあいさつといたします。

～平成29年2月～

第一章 あの日、あの時、そして輝く未来へ

地元を離れての学校再開

校舎損壊からの学校再生

仮設校舎での学校再開

臨時休業中の学校

そして 他県への避難

子どもの様子は

保護者の様子は

それでも学校は

子どもたちは前を向いた

「ふくしまの未来」のために



(1) 学校再開・再生とその後

これまで、そしてこれから

南相馬市立原町第一小学校 校長 佐藤 昌 則

震災前、原町第一小学校の児童数は600名であった。東日本大震災、福島第一原子力発電所事故後、転出や区域外就学を希望し、現在の児童数は412名となっている。

1 はじめに

本校は、福島県の浜通りに位置する南相馬市原町区の中心部にあります。明治6年南新田小学校として創設され、2013年に創設140周年を迎えました。当時植樹され現存する4本のけやきは、学校のシンボルとして地域住民からも親しまれています。震災前は、全校児童600名、マーチングバンド部が全国大会へ連続出場するなど部活動も盛んに行われていました。

◇震災当時の様子

午後2時46分、今までに経験したことのない突然の突き上げるような縦揺れとそれに続く長い横揺れ。避難指示放送により、担任に引率された児童たちが次々に避難場所である校庭に集まってきました。全児童の安全を確認し、迎えに来られた保護者に児童を引き渡し終わったのは午後7時過ぎでした。体育館が避難所となったこともあり、管理職を含む教職員5名が学校に泊まりました。

◇その後の様子 安否・就学先確認

通信遮断により思うように連絡が取れない中、津波被害や原発事故の追い打ちにより、突然に避難を余儀なくされた家庭の安否・所在確認、就学先確認には時間を要しました。また、国や県から通知、依頼文がありましたが、避難先の受入が区域外就学、体験入学、聴講生扱いなどまちまちで、一時その対応にも追われました。

2 学校再開（4月22日）

4月12日の市臨時校長会議において、「小中学校の学校再開計画・工程表」が示され、17の小中学校が30km圏外の学校を間借りして授業を再開することになりました。教職員、PTA総出で机椅子をはじめ、教育機材、教材備品などの搬入、新年度の準備などを整え、4月22日、140人の児童を迎えました。授業再開の喜びは、先の見通せない不安や苦労を払拭するものでした。



教室での入学式

鹿島小と間借りしていた本校ほか、原町三小、小高小の代表者などによる合同会議を定期開催し、校務運営上の課題や対応策などについて協議、連絡・調整を行い、効率的な運営、施設利用を工夫しました。防災対応マニュアルの見直し、地震や津波を想定した避難訓練、家庭との連携の在り方など、喫緊の課題として合同対応するとともに、スクールバスに教員が交代で必ず同乗し、登下校時の児童の安全確保にも努めました。

9月末の「緊急時避難準備区域」解除、市による表土除去、校舎除染が終了し、10月17日から自校に戻り学校を再開することができました。放射能への不安を抱えての帰還でしたが、屋外の放射線量でも一時間当たり0.1マイクロシーベルトに低減し、間借りや一部仮設教室から自校の広々とした校舎に戻るにより、教育環境は劇的に改善されました。

9月末の「緊急時避難準備区域」解除、市による表土除去、校舎除染が終了し、10月17日から自校に戻り学校を再開することができました。放射能への不安を抱えての帰還でしたが、屋外の放射線量でも一時間当たり0.1マイクロシーベルトに低減し、間借りや一部仮設教室から自校の広々とした校舎に戻るにより、教育環境は劇的に改善されました。

◇自校再開後の学校運営上の課題と対応

同一歩調での学校経営から、なにからなにまですべて単独校で対応することの大変さはやりがいがありま

した。

自校再開後の課題と対応として

- ① 児童の計画的、継続的な心のケア
 - ・ＳＣによるスクリーニング、面談の実施
- ② 自家用車による送迎時の乗降指導
 - ・乗降場所の指定、一方通行
- ③ 放射線被ばくの低減化対応
 - ・授業の中での放射線に関する指導
 - ・屋外活動の制限２～３時間ルール 次年度４月から制限解除
 - ・給食食材の事前事後検査（各校検査員常駐）
 - ・校地内放射線量の定点測定
- ④ 学力低下の懸念
 - ・学力検査の分析と校内研修の充実、個別支援
- ⑤ 体力低下・肥満傾向児の増加
 - ・教科体育の充実、業間・体育集会の計画的継続的实施、外部講師
- ⑥ 生活習慣の改善、規範意識の向上
 - ・アンケートなどによる実態把握と共通実践、家庭向け手引き作成
- ⑦ 交流、支援、マスコミ対応
 - ・マーチングバンドが取り持つ他県小学校などとの交流、支援事業・マスコミ取材などへの対応

3 学校の今、そしてこれから

震災から５年。学校の周辺では除染、復興住宅の建設が進み、多くの作業員の方が従事し活況を呈しています。そのため夜９時頃まで店の明かりが灯り、街としてのインフラやサービスも回復基調にあります。２７年度、本校の児童数は４００名を越え、教育活動もほぼ震災前に戻っています。しかし、ばらばらになったまま戻れない家族、分断された家庭や地域の教育力、進学を含めた教育環境の回復など、学校に直結する諸問題が長期化複雑化してきています。

これからを考えると、学校は地域の「心の復興拠点」として、家庭や地域と積極的に連携し、関係性を構築するとともに、校内においては、郷土を愛し夢と希望をもち、挫折や苦難に負けない知・徳・体のバランスのとれた「生き抜く力」が備わった子どもたちの育成に向け、教育活動を展開していくことが必要と考えます。

本校においては、心のケア、防災教育、放射線教育などの震災対応、学力や体力の向上、強い心と郷土愛を育む道徳教育、強みを伸ばす音楽部活動支援、普通教室へのＩＣＴ機器の導入などを通して特色ある教育活動を展開し、明日を担う有為な人材を育てたいと考えます。

4 おわりに

教育とは、結局のところ乗り越える力をつける営みです。そして、その乗り越える力の原動力は、夢と希望と明日への努力ではないでしょうか。子どもたちの笑顔がはじけ、夢の実現に向けて希望をもち、目標に向かって挑戦し続けることができるよう職員一丸となり支援していきます。



市制10周年式典で市民歌を歌う5年生



卒業式後担任と

(2) 震災・原発事故と避難児童を受け入れた学校

避難児童を受け入れた学校の取組

三春町立岩江小学校 校長 野木 達雄

平成23年4月に、児童数235名でスタートしたが、7月下旬頃、県内各地に避難していた葛尾小学校の児童が転入してくるという情報が入った。8月1日付の転入児童数は、1学年3名、2学年11名、3学年4名、4学年4名、5学年5名、6学年6名、計33名であった。

1 避難児童を受け入れた時の状況

- (1) 学級編制について…3学年は32名で1学級であったが、4名プラスで、1学級増となり、兼務教員1名が新たに赴任した。また、特別支援学級に2名がプラスされ、1学級増となり、兼務教員1名が赴任した。障がいの状況が分かったのは、8月に入ってからで、その対応に追われる状況であった。転入の手続き・教科書の手配等は、避難していた学校からの情報のみで進めざるを得なかった。
- (2) 兼務教員について…兼務教員2名は、その年の8月に葛尾小学校に着任した教員であったため、子どもたちの実態の分かる教員を探し出し、情報の収集に努めた。
- (3) 教室環境等の整備について…まず、児童の机や椅子が足りなかった。県外の小学校からの支援物資の中から机や椅子を取り出したり、三春町の廃校となった学校から使える物を譲り受けたりして調達した。また、転入児童は、何も持たないでの避難であったため、授業で使う物がそろわない状態であったが、葛尾小学校の教員が一時帰宅の際に持ち出してくれ、児童に渡すことができた。
- (4) 通学について…6つの仮設住宅からの登校で、方部別に2台のスクールバスで対応してもらった。下校時は、低学年は高学年の授業が終わるのを図書室で待っているようにした。教員が必ず1,2名付き、毎日見送るようにした。また、中学生と同じバスの時は、バスの中で部活が終わるまで待つということもあった。
- (5) 当初の授業について…進度に若干の違いはあったが、問題なく進めることができた。テストや教材はコピーなどをして対応した。学級の子どもたちには、避難児童の状況を説明し、早く溶け込めるようにした。また、転入児童同士の席を近くに配置し、少しでも不安な気持ちを取り除くよう配慮した。特別支援学級に入級した全介助の児童の教育課程については、県中教育事務所の指導を受けながら手探りで実施した。
- (6) PTA活動について…全村民が避難して、たいへんな生活の中、PTAの奉仕作業や資源回収などいろいろと協力していただいた。葛尾の方々の意見をPTAに反映させるため、PTA三役に入ってもらったところ、快く引き受けていただき、様々な活動に献身的に参加していただいた。元々の葛尾地域のコミュニティーのすばらしさを実感することができた。
- (7) 児童の様子について…葛尾の児童の中には、不登校気味の児童や家庭に問題の見られる児童もいたが、SSWと連携して対応した。今回の震災避難だけが原因ではないかもしれないが、児童も保護者も多くの不安を抱えていたことは間違いのない事実である。子どもたちからは、「仮設は狭くていやだ。」「仮



平成23年8月の全校集会で33名の転入生を迎える

設には友達がいなくて寂しい。」「学校帰りに校庭で思い切り遊びたい。」「もう、転校したくない。」というような声が多く聞かれた。

2 葛尾小学校の再開

転入して1年半が過ぎた平成25年4月、葛尾小・中学校が、旧三春町立要田中学校で再開することとなった。「もう転校したくない。転校させたくない。」という保護者・児童と葛尾小・中学校に戻る保護者、役場関係者の間で何度も話し合いが持たれた。岩江小学校に残る場合は、保護者の責任のもと、送り迎えをするという条件がつけられたが、岩江小学校に残留を決めた保護者ばかりでなく、転校を決めた保護者の中にも、この間の経緯が一番の悲しいこと、一番のしこりとして残っていると話してくれた方がいた。

《保護者からのひとこと》

★ 子どもにとって自分だけでなく、葛尾小学校の友達と一緒に転入できて心強かったと思います。でも、仮設に入居してすぐ子どもから「もうずっと、この仮設住宅での生活でいいから、もう転校はしたくない。」と言われたことを、今でも鮮明に覚えています。しょうがないことではありましたが、転校するということがどれだけ子供の負担になっていたのかを思うと涙が止まりません。しかし、子どもたちは「学校へ行きたくない。」と一回も言わず、新しい友だちができたことなど、学校でのことを報告してくれたのが、たいへんありがたかったです。

★ 会津での体育館からの通学を経て、二学期から岩江小学校での生活が始まりました。親も子も不安だらけでした。今でもその頃の娘の写真を見ると可哀想に思います。笑っているのだけれど、どこか笑っていない娘の笑顔でした。食べているのに、身長がほとんど伸びない。娘にとって本当につらかった1年だったかもしれません。口に出すこともなく、普通にはしていても、子どもなりに、本当に頑張っていたのでしよう。

★ 雨の日でも、雪の日でも葛尾の学校はスクールバスがでるのに、私たちは苦勞して毎日送迎しています。子どもが「岩江に残りたい。友達とこれ以上、離ればなれになりたくない。」と必死で言うので、私たちは子どものことを考え、頑張ってきました。子どもたちが友達と楽しく遊んだり、学習発表会や運動会で友達と頑張っている姿を見ると、涙が出るほどうれしく思います。避難によって結ばれた絆を大事にしながら、子どものことを最優先に考えながら、進んでいこうと思っています。

3 むすびに

葛尾小学校再開前より、岩江小学校の運動会や学習発表会の時に、葛尾小学校の校長先生が来校し交流・見守りをしていたが、葛尾小学校再開後も、毎年、鑑賞教室や学習発表会など、いろいろな行事を通して、児童同士の交流を深めている。

葛尾の子どもたちや保護者との出会いは、本校の児童、教職員、保護者、岩江地区の方々にとって、大きくプラスに働いたと感じている。それは、両校の子どもたちを中心にして、周りの大人が、手を携えて、協力して温かく見守ってきた結果によると考えている。

福島県教頭と埼玉県教諭の併任教員としての取組

南相馬市立小高小学校 教頭 高野 伸一郎
平成24年度・25年度 埼玉県加須市立騎西小学校派遣
(双葉町立双葉南小学校籍)

震災直後の3月19日に双葉町民約12,000名が「さいたまスーパーアリーナ」へ避難。3月30日には、旧埼玉県立騎西高校の校舎に移る。

避難に伴い幼稚園児7名、小学生99名、中学生46名が近くの加須市立騎西幼稚園・騎西小学校、騎西中学校へ区域外就学を行う。

震災後、埼玉県加須市へ役場機能ごと避難した双葉町の教頭として、私は区域外就学先の埼玉県加須市立騎西小学校へ派遣された。私が派遣されていた2年間、福島県から同様に派遣されていたのは泉田淳教頭(現浪江小学校)藤原謙教頭(現大玉村教育委員会)佐藤大志教諭(現広野小学校)佐藤衛教諭(現千葉県南新浜小学校)である。我々は、避難所で寝食を共にしながら福島県や双葉町の子どもたちの未来について語り合い、アイデアを出し合いながら、常に協働体制で取り組んだ。以下に取り組みの一部を紹介したい。

1 福島県(主に双葉町)から区域外就学をしている児童への取組

騎西小学校に避難した児童へ行った避難後の困りごとアンケートでは「勉強面で困る」(43%)「ストレスで体に変化」(41%)「ストレスで気持ちに変化」(77%)という結果が出た。そこで以下の取組を行った。

(1) 学力向上の取組

- ・放課後に騎西小学校の図書室で、ふたばっこ学習会を行った。
- ・児童の能力に応じた個別の学習プリントを用意し、補充や発展の学習指導を行った。
- ・T1又はT2として授業に入り、個別指導の充実を図った。

(2) 児童の心の安定を図る取組

- ・加須市から派遣されたスクールカウンセラーと連携を図りながら児童一人一人と教育相談を行い心の状態把握を行った。
- ・自分の将来や未来に夢や希望が持てるよう、3人の併任教員で児童のキャリア観を養う道徳の授業に取り組んだ。
- ・避難所からの登校する時の不安を軽減させるため、集団登校の集合場所まで毎朝迎えに行き、一緒に登校した。
- ・3・11集会を企画立案し、震災を客観的に見つめる視点を育てるとともに、避難してきた児童が風評被害に遭わないよう埼玉県の児童の人権擁護に対する意識を高めた。

(3) 保護者支援の取組

- ・毎月「ふたばっこ通信」を発行し、騎西小学校での児童の様子やPTA活動等を紹介し、家庭への情報提供に努めた。
- ・学校行事の内容を工夫し、騎西小学校の運動会に「双葉南小・北小の校歌」を鼓笛に取り入れたり、「双葉音頭」を取り入れたりしながら、郷土の誇りを失わないようにした。
- ・教育相談週間を設定し、福島県から派遣された教員に気軽に相談できる体制作りに取り組んだ。

2 埼玉県加須市立公立小学校教員としての取組

年度当初に100人近い児童が急遽転入したため、教職員数が人事異動で予定していた数では不足した。また、職員構成も講師も含め教職経験6年未満が19名と非常に若い教職員が多いため、校務運営の中で併任教員が果たすべき役割も大きいと考え、以下の取組を行った。

(1) 若手教員への支援

- ①学習指導や生徒指導に関するの指導助言
- ②体験学習や水泳学習の支援(準備や安全確保)
- ③教員採用試験に向けた勉強会の運営と指導

(2) 学校運営への支援

- ①騎西小学校の支援要請と双葉町教育委員会との連絡調整
- ②騎西小学校在籍の不登校児童とその家庭への支援
- ③特別支援学校との連携を図った特別支援教育の充実

以上のような取組ができたのは、当時の騎西小学校の松井政信校長先生が優れたリーダーシップを発揮してくださったからである。人権に対する意識が高く、福島県を愚弄する雰囲気を決して許さない態度は、避難してきた児童が安心して過ごせる空間を提供できた原動力でもある。また、福島県併任教員への的確なアドバイスと寛大な配慮にも感謝申し上げたい。

(3) あの時の子どもたちは今…未来の夢

震災、それから

葛尾村立葛尾小学校1年児童保護者 松本 卓

あの日、娘の彩楓はまだ2歳でした。葛尾村の自宅で震災に遭い、周辺地域に避難指示が出ている中、葛尾村にもいつかは避難指示が出るのではないかと不安でしたが14日の夜に突然の防災無線により葛尾村も全村避難の指示が伝えられました。彩楓を寝かしつけている最中のことでした。パジャマのままの娘たちを抱いて葛尾村を飛び出ることになったのです。子どもたちがまだ幼かったので、その時は健康上の不安のことしか頭にありませんでした。なるべく外気にふれさせないようにと、怖くて仕方なかったことを覚えています。

それから、避難所や親戚宅を転々とし、同年4月には郡山市に一戸建てを借りて、この地で彩楓は就園、就学することになりました。葛尾村の幼稚園は隣の三春町に開園していましたので、バスで通園しました。途中、1人しかいない同級生が転園したため、たった1人で卒園しました。幼心には寂しかったと思いますが、よく頑張ったと思います。

小学校入学時も、1人だけの1年生となるため、友達がたくさんいる学校の方がよいのではないかと、親としてとても悩みました。しかし、葛尾小学校ではそういう状況であるからこそ様々なフォローがあり、普通の1年生ではできない体験をさせていただいています。今や彩楓は1人ではなく、学校全体が彩楓を応援してくれている！そう思っています。

これからは葛尾村への帰村に向けての「悩み」が出てくるかもしれません。学校が村へ帰村した時、更に子どもが減るのではないかと私は懸念しています。葛尾村へ1人でも多くの子どもたちが帰還することを願うばかりです。

(震災当時 葛尾村在住 入園前の2歳)

ぼくはぼく

会津美里町立本郷小学校3年 齋藤 陽生

～前略～

ぼくは、自分がふたばで生まれたからふたばの子なのか、会づにすんでいるから会づの子なのか、ちょっとなやむことがあります。会づにきて、たくさんの友だちができました。しぜんがいっぱい、雪あそびもできて、おいしいものがいっぱいの、会づが大すきです。でも、さくらの木の下を、ママとてをつないでさん歩した思い出のみち。川のそばの白いアパート。はたけのなかをいとことたんけんしてあそんだ、おばあちゃんの家。やさしかった、ほいく園の先生。ぼくがかわいがっていたねこたち。いろいろ思い出すと、やっぱりぼくはふたばの子かな、と思えてきます。ふたば町には、家ぞくみんなでくらしただ切ない思い出がたくさんあるからです。

ぼくがいろいろ考えていたら、ママが、

「はるくんは、はるくんだよ。ふたばっ子だけど、あいづっ子。りょうほう大じなはるくんだよ。」

と、話してくれました。ぼくはそうか、と思いました。

ぼくは、今でもふたば町が大すきです。なつかしいな、ふたばにかえりたいなって思うこともあります。でも、今は会づにすんで、やさしい人たちにたくさんあって、毎日元気に、楽しく学校に通っています。

～後略～

(震災当時 双葉町在住 まどか保育園)

※「平成26年度明るい社会づくり作文コンクール 県教育長賞受賞作品 抜粋」

僕の将来の夢

いわき市立久之浜第一小学校5年 小林 雄 翔

「頭を下げて。しっかりとバスにつかまっていなさい。」

急に、先生が大きな声で叫んだ。

平成23年3月11日。僕たちの生活が大きく変化した。東日本大震災。

僕は幼稚園の帰りのバスの中で地震を経験した。先生が叫んだ直後、バスが大きく揺れた。その他のことはあまり覚えていないが、バスが大きく揺れていたことだけはよく覚えている。

家に帰ると部屋の中が散らかっていた。電気もついてなく、部屋の中が真っ暗だった。水道の水も出なかった。まだ幼稚園児だった自分には、この状況がどういう事態を意味しているのか、理解できていなかった。

そうしてしばらくすると、テレビやニュースで津波や原子力発電所の爆発で大変だったことが分かった。

幼稚園の年長だった僕は、まもなく卒園式を迎える時期だった。幼稚園では、何度も卒園証書をもらう練習をした。家でも練習を行っていた。僕は、幼稚園で遊ぶことが大好きだった。夏は、近くの海に行って、泳いだり、遊んだり。とにかく大好きな幼稚園だった。

母から、

「幼稚園、津波で流されちゃった。」

という話を聞いた。何が何だか分からなかった。

「津波」「何」「流された」「何で」

分からないことだらけだった。

時間が経ち、僕は幼稚園に行ってきた。僕の知っている幼稚園は無かった。春にはきれいな桜が咲いていたが、その桜が1本しか残っていなかった。それがとても残念だった。

園長先生は、卒園式の準備物は2階に置いてあったので、卒園証書などは無事だったと話されていた。本当に津波は怖いと感じた。生活も大きく変化した。僕は久之浜第一小学校に通う予定だったが、実際は中央台北小学校に通うことになった。原子力発電所の爆発によって、学校を移動しなければならなかった。半年間だったけれど、ここでの学校生活はとても楽しかった。しかし、久之浜第一小学校に行ってみてみたい気持ちもあった。

10月になり、いよいよ久之浜第一小学校に戻ってきた。

僕は校庭を見て、とても喜んだ。そこにはサッカーゴールがあった。

「やったあ。サッカーができる。」

と興奮したのを覚えている。

今、僕は、5年生になった。最近はたくさんの友達に囲まれ、楽しく学校生活を送ることができている。将来の夢も考えられるようになった。僕の将来の夢は、車や物を作る会社の経営者になること。そしてお金持ちになることだ。先生に

「なんで、お金持ちになりたいの。」

と聞かれたことがある。

僕は、先生に、はっきりと理由を話すことができた。

「僕の父や母は、僕たちのために、毎日一生懸命に仕事をしています。だからおいしいご飯を食べたり、遊びに行ったりすることができます。あの震災の時もそうでした。だから、僕も大きくなったら、父と母には、おいしい物を食べてほしいし、楽しく暮らしてもらいたいからです。」

もしかすると、大震災を経験しなかったら、この思いは、こんなに強くなかったかもしれない。

この夢に向かって、一日一日を大切に、努力を積み重ねることが大切だ。勉強も運動もがんばりたい。さらに大切にしたいもの、それは家族。当たり前のことかもしれないが、家族を大切に思う気持ちを、ずっと持ち続けたい。そして、父のような経営者をめざしたい。

(震災当時 久之浜第一幼稚園)

ランドセル

会津若松市立第二中学校1年 伊藤 要

平成23年3月11日、僕は富岡町に住む小学2年生でした。小学校で帰り支度をしている時に、東日本大震災が起きました。

原発事故もあり、僕たち家族は、母の実家のある会津若松市に避難しました。まさか長期の避難になるとは思わなかったので、持ち出した生活用品もわずかな物でした。僕の学用品も全て富岡町の小学校に置いてきたままでした。

新年度から会津若松市の小学校に通うため、教育委員会に母と行きました。手続きが終わると、ある部屋に案内されました。その部屋に入ると、たくさんの学用品が積まれていました。ノートや鉛筆などの文房具や、絵の具のセットなどが、日本中から支援物資として集まっていました。その中にランドセルもありました。僕が選んだランドセルにはプロ野球チームのシールがはられてありました。6年間使用している間についてであろう細かい傷もありましたが、まだまだ使える物です。僕は、「どんな子が使っていたんだろう。野球が好きなのかな。」と頭の中で想像しました。そして、一度も会ったことのないランドセルの持ち主の子ですが、友達になったような気持ちになり、「ガンバレ」と応援されているように感じました。僕は、その支援物資として届けられたランドセルを背負い、始業式の日には転校先の学校へ向かいました。友達は1人もいないし、不安だらけでしたが、ランドセルを背負った背中が、なぜか温かく感じ、まるでランドセルに励まされているかのようなようでした。

あれから5年がたちました。今は会津若松市での生活にも慣れて、現在会津若松市立第二中学校の1年生です。サッカー部に所属し、練習に励んでいます。また生徒会本部役員にもなり、新生若松二中の原動力となる気持ちでがんばっています。

一度も会ったことのないランドセルの持ち主の人に一言、言いたいです。

「あなたのおかげで勇気ができました。本当にありがとう。」

(震災当時 富岡町立富岡第一小学校2年)

震災が生んだ出会いと夢

福島県立福島高等学校2年 武内 優

震災当時6年生だった僕は、今高校生活最後の1年を迎えようとしている。高校では野球部に所属し、主将を務めている。小学校2年から野球を始め、大熊野球スポ少、蓬萊中ともに主将を務めてきた。この震災を通して、僕が成長できたのは多くの人との出会いと主将という役割があったからかもしれない。

あの日、僕たちは小学校の卒業式を目前にしていた。突然の地震、そして原発事故。熊町小学校を卒業して、大熊中学校に入学し、野球部に入る。当たり前を訪れると思っていた未来が見えなくなった。学校にも行けない日々が続いた。そして4月。僕は知り合いが1人もいない福島市の中学校に入学した。友達と会えないことは悲しかったが、野球を通してすぐに友達ができる。何より野球ができることがうれしかった。中学校の野球部は仲良しグループで、練習中ふざけることも多く、負けても悔しがることのないチームだった。小学校のチームは野球馬鹿の集まりで、うまくなりた、強くなりた、と本気で考え真剣に練習していた。それだけに、僕は中学のチームにもどかしさを感じていた。小学校の頃のように、チームメイトが刺激し合い、みんなが努力する、そんな野球がしたいと願い、主将として思い切って伝えた。「真剣に野球をして、このチームで勝ちたい。このメンバーで勝って笑いたい。」話しながら涙が溢れてきた。それから数か月、僕たちは必死に練習した。

中学校最後の大会。対戦相手は練習試合で負けているチームだ。声を掛け合い、励まし合い、好プレーの

たびに手を叩き喜んだ。僕らはベンチで初めて一つになり、勝利をもぎ取った。小学校以来忘れかけていた感情が蘇った。「やればできる」全員がそう感じた瞬間でもあった。敗れた時も、拳を握りしめ涙を流す者、人目を憚らず大声で泣く者、本気で悔しがった。その姿を見てこう思った。人は変わることができる。そして、自分の思いを伝え続ければ、人を変えることができる…。

高校生になり新チームの主将になった僕は、練習やチームの在り方など自分の思いをチームメートや監督に伝え、一つ一つ実現させている。そんな僕の今の夢は、甲子園に行き、今まで支えてくれた多くの人に恩返しをすること、少し格好つけて言えば甲子園に行き福島に元気を与えることだ。昨年夏の福島大会、開幕戦で、双葉町出身の先輩とアベックホームランを打ち勝利した。新聞にも取り上げられ、多くの人から声をかけていただいた。甲子園に行くことができれば、より多くの人に思いを伝えることができると思う。大熊でお世話になった方々や福島で知り合った人、友達や仲間に野球を通して感謝の思いを届けたい。震災で苦しい思いをしている人たちに、環境が変わっても自分の思いが変わらなければ願いは叶うこと、そのために僕たちはさらに努力し続けなければならないことを伝えたい。

そしてもう一つ、教師になるという夢が芽生えた。野球に対する夢を育んだ小学校で、友達もいない一からのスタートだった中学校で、大きな夢に向かって進む高校で、多くの先生や指導者に会った。そして、教師は人を変えることができる職業であり、夢を語れる職業だと知った。僕は震災を通しての経験を生かし教師になって僕にしか伝えられないことを伝えていきたい。それは、夢を持つことのすばらしさである。そして、夢に向かって努力し続け、実現するという最高の瞬間を味わわせてあげたい。

僕は震災以来ふるさとに帰っていない。温かい思い出いっぱいの家、小学校、グラウンド。震災がなかったら…。そう思うこともある。しかし、僕は震災で、会うはずのない多くの人と出会った。そして、その出会いからたくさんを学んだ。震災があったからこそ、今の僕がここにいる。震災が生んだ多くの出会いに、僕は心から感謝し、夢に向かって進んでいきたい。

(震災当時 大熊町立熊町小学校6年)



全国高等学校野球選手権大会 福島大会開幕戦

第2章 座談会

「あの日、校長として。そして輝く未来へ。」 (割愛)

第三章 福島教育 そして輝く未来へ

東日本大震災から今日まで学校再開、避難児童への支援に尽くした教職員。ともに困難を乗り越えようとして励まし、復興に向けて力強く歩んできた保護者やPTAの関係者。

忘れてはならぬ

忘れさせてはならぬ

鎮魂の想いと

未来を築き

これからを生き抜く子どもたちへ

エールを込めて・・・今、伝えたい思いを綴る。



(1) 「ふるさと『ふくしま』の未来を担う子どもたちの育成に向けて」

平成25年度～平成27年度の取組

福島県の子どもだからこそ

福島市立福島第三小学校 校長 土屋 悦 男

1 「生き抜く力」と…

震災以降、混乱していた福島教育もようやく元に戻りつつある。しかし、いまだ県内では小学校で7校が臨時休業中で、避難している子どもたちも大人も難儀な生活を送っている。4月にはふるさとのかすかな記憶しかない子どもたちが小学校入学を迎える。とてもやるせない気持ちだ。ここ福島市は自主的に避難している子どもはいるが、学校が休校になっているところはない。学校の敷地も除染され、震災前とほぼ変わらない生活を送っているが、今でも全国からいろいろな支援をいただいている。支援をいただいている子どもたちの気持ちはどうなのだろう。心から感謝しているのだろうか。学力を含めた「生き抜く力」の他に、今の福島だからこそ育てなければならぬ資質・能力があるとすれば、それは「共生意識」と「ふるさとの誇り」ではないだろうか。

2 共生意識

平成24年の12月には京都市立梅津北小学校の子どもたちのメッセージと「絆」という文字がデザインされた大凧揚げが松川の河川敷で行われた。梅津地区の地元保存会の方々やPTAの方々など、全て自費で来福しての励ましであった。また、今年度は同じ京都の京都第二小学校からの申し入れで、野山の自然物を送っていただいた。この学校は、児童数61名の小規模学校であるが、ふくしまの子どもたちは自然物を集めることが出来なくなって困っているという報道に心を動かされて、6年生が中心になって計画し、全校生で段ボール箱数個分の松ぼっくりやクリ、ドングリ、紅葉した木の葉、花の種などを送ってくれたのである。いくら自然に囲まれた学校とはいえ、これだけの量を61人で集めるのは容易なことではなかったと思う。本校の子どもたちは、自然物を見てどのように感じただろうか。もちろん1・2年生は大喜びである。先生方は6年生(10名)が中心になっての活動ということで、早速児童会担当に話してみた。担当はそのことを子どもたちに話したが、反応は今一。自分たちの学習とかけ離れているからだろうか。それとも、支援をしていただくことに何も感じなくなっていたのか。相手がどんな思いで送ってくれたかについて、私たち教師自身の気付きも甘かったためか、子どもたちが進んで取り組んだとは言い難い。相手方の思いや具体的な活動等に、子どもたちが思いを馳せることができれば、いかに尊い行為だったかに気づき、子どもたちの主体的な活動につながったように思う。5年生が中心になり、三小の子は元気であることを発信することができ、京都第二小学校の反応に先生方の強い思いを感じていた。

支援を機に、「絆」の意味をしっかりと考えさせ、「共生意識」の醸成を図っていきたい。

3 ふるさとの誇り

原発の事故後、食の安全ということから口にするものへの関心が高まっているとともに、子どもたちは土にふれることが少なくなってしまう。そんな状況から人間の命をつなぐ根本が「食」であることを考え、第一次産業である農業に関心をもたせるために、5年生の宿泊活動は農業体験を中心に実施した。合わせて総合的な学習でも「食」を取り上げ、継続的に学習することができるようにした。子どもたちは2日間の体験では農業のなんたるかを理解することはできないが、農業に携わる方々がどんな思いと知恵等で仕事をしているかなどに触れることはできたと思っている。どんな状況でもおいしく安全な作物を作ることが、福島県の農業の誇りになっていることに気づいたのではないだろうか。また、6年生には尾瀬にどっぷり浸かせた。世界に誇れる自然と保護活動に、改めて福島県人の矜持に気づいたと思っている。

4 福島県の子どもたちだからこそ

「絆」という言葉が空虚に一人歩きしている。本来心も含めた「助け合い」ではあるが、「合い」が見えない。合いどころではないのかも知れないが、災害はこれからも起こりうる。そのときに、まごころで支援ができる人間になってほしい。助けていただいたふるさとのことを思い、相手方の困窮の状況に鑑み、何をすべきか考え、実行する人間を育てなければならない、と感じている。

(平成26年2月26日発行 会報 第238号より)

子どもたちの可能性を信じて

相馬市立中村第二小学校 校長 林 宗一郎

1 はじめに

震災後、3年10か月が過ぎ、学校の教育活動は、震災前と同程度に展開されるようになりました。除染の済んだ校庭では、元気に運動する子どもたちの姿が見られます。一方、校外に目を向けますと、学校周辺には公営住宅が次々と建設され、復興に向けた取組が確実に進行していることを実感できます。

また、震災後懸念された児童の心のケア面でも、震災の影響が考えられる児童はいなくなりました。本校の子どもたちは、明るく活発で、対外行事での活躍がめざましく、その秘めたパワーを感じさせます。しかし、学校生活を見てみると、学習面、生活面において、本来もっている「やればできる、がんばろう」という前向きに進む力が十分発揮されていないように思われてなりません。その要因の一つが一人一人の自信のなさに起因しているのではないかと考えています。復興の担い手としてたくましく育ててほしいという願いをこめながら、課題解決に向けた本校の取り組みを紹介します。

2 復興を担う子どもの育成

(1) 学校行事への取組

本校では、毎年秋に、「浜っこフェスタ」が行われます。今年度は、総合的な学習の時間、生活科、その他の教科等で学習した内容を保護者、地域の方々を迎えて発表しました。子どもたち一人一人がそれぞれの役割を担い、自己目標をもって取り組みました。発表後の子どもたちの表情には満足感が漂っていました。仲間と共に活動し、目標が達成できた喜び・達成感は、子どもたち一人一人に自信を与えてくれると確信しています。

(2) 地域行事への参加

本校には、伝統として受け継がれてきた特設クラブ、「原釜太鼓」があります。昼休みに上級生が中心となって下級生に教えながら自主的に練習を行い、その練習成果の発表の場として地域のお祭り等に参加しています。渾身の力を込めて打つ太鼓の力強い響きは、演奏する子どもたちの「聞いてください。私たちのこの音色を」という思いを表しているようです。演奏終了後の観客からの賞賛の拍手は、子どもたちに、自信と誇り、充実感を味わわせてくれました。このやりとげた満足感が、さらなる目標設定と活動意欲につながっていくものと確信しています。2つの例を紹介しましたが、大切なことは、小さな成功体験を積み上げ、子どもたちに「やればできる」という自信をつけさせていくことだと考えています。そのためには、教師の励まし、賞賛が欠かせません。このことは、日々の学習指導にもあてはまります。

(3) 教員の指導力向上

子どもたちの能力を引き出し、それを発揮させるために欠かせないのは、教員一人一人の指導力の向上です。本校では、昨年度より相馬地区小教研図画工作科の研究指定を受け、校内の現職教育の中で実践研究を進めています。授業の中で子どもが感じ取ったことや想像を膨らませる場を設定し、それを受け止める環境を整えることで、表現活動においても、自分の発想や構想も能力に自信をもつのではないかと考えています。そのために、校内での授業研究会や外部講師（教科のエキスパート）を招いての授業実践等を行い、教員一人一人の指導力を高め、子ども一人一人の感じ方を大切にされた指導につなげていけるよう取り組んでいるところです。

3 むすびに

本校の児童が持っている秘めたパワーを発揮させるためには、子どもたちに「やればできる」という自信をもたせていくことが必要です。そのためにも、私たち教師は、自己研鑽に励み、子どもを見取る力を高め、日々の教育活動にあたっていかなければなりません。これからの子どもたちの可能性を信じて、『ふくしま』の未来を担うたくましい子どもの育成を目指し、全職員が丸となって取り組んでいきたいと思えます。

(平成27年2月27日発行 会報 第240号より)

(2) あの時の私たちは今、そして輝く未来へ

悲しみを越えて希望へ

須賀川市立阿武隈小学校 校長 佐藤 安喜

本校は、開校42年目を迎える。震災時は、学級数19で、456名の子どもたちが学んでいた。校舎一部に破損が見られたが、授業等に支障はなかった。ほぼ、震災前の教育活動に戻りつつある。

1 はじめに

3月11日の記憶を鮮明に覚えている。当時は、現在の学校の近くにある小学校に勤務していた。

午後2時46分。5校時目が終わり、各クラスは帰りの会だった。大きな揺れが下から起きた。何度も。重い耐火書庫が動いた。屋上の高架槽タンクが裂け、水があふれた。校庭に避難した。校庭の一部が割れていた。泣いている子がいた。雪が散らつき寒かった。近くの子は集団下校、残りの子は迎えを待った。引き渡しが終わったのは午後7時過ぎ。夕方から学校への避難者が相次いだ。教室が避難所になった。夜10時を回る頃には、7つの教室に100名近くが避難した。夜中、学校周辺の様子を見に行った。家屋の損壊、ブロック塀の倒壊…。予想以上だった。須賀川アリーナに寄った。病院から運ばれてきた入院患者が寝ていた。点滴の装置が異様に見えた。学校に戻った。



散乱した図書室の本

外は雪。3月11日が終わった。

2 あの日を忘れない

震災から五年が経過した平成28年3月11日の追悼集会での話。

東日本大震災、あの大きな地震から5年が経ちました。

今の6年生が、小学校1年生の時の今日、地震が起きました。あの時も今日と同じように中学校の卒業式がありました。みなさんの中にも、あの時のことを覚えている人もいます。校長先生にとっても、今まで経験したことのない、想像できないほどの地震や津波でした。

18,000人。とても悲しい数字です。これは、その時の地震や津波で亡くなった人の数です。この数は、皆さんの多くが進学する須賀川市立第二中学校の今までの卒業生の数とほぼ同じです。卒業生の数は、毎年毎年の卒業生の積み重ねです。この18,000人の数になるまで、68年間かかっています。とても長い年月です。それが、たった1日で、いっぺんに命が消えてしまったのです。この中には、皆さんと同じ小学生も含まれています。

今日、3月11日は、亡くなった18,000人の人のことを思う日です。と同時に、命のこと、家族のこと、地震や災害のことについて考える日です。今日お家に帰ったら、家族の人に5年前の今日のことを聞いてください。これからも、あの日を忘れないで生活しましょう。

3 おわりに

悲しみは、いつまでも変わらない。悲しみを越えて変わるのは、希望だけのような気がする。子どもたちに希望を持たせる日々の授業や活動を、今後も大事にしていきたい。

子どもたちの未来につなぐPTA活動

元福島県PTA連合会 会長 佐藤辰夫

1 はじめに

福島県PTA連合会は、県内の公立小学校、中学校の単位PTAが加盟する郡市PTAの18連合会で組織されており、各連合会等と連携し県内教育の刷新向上を目的とする社会教育団体です。私が本連合会会長に就任した平成22年度は、児童生徒数17万9,534人、小・中学校数は759校でした。東北ブロックでは一番大きな組織です。しかし平成23年3月11日の東日本大震災、これに起因する原発事故により児童・生徒の県外避難などによる流出で通常の減少率を大きく上回り、昨年度（27年度）は児童生徒数15万809人、小・中学校数700校となりました。

2 PTAの役割とは

震災当時を振り返ると、本連合会も思うような運営も出来ず大変な苦勞をしました。子どもたちの命をどう守ればいいのか。いじめや差別などの人権問題から子どもたちを守るにはどうすればいいのか。学力向上以前に学力が維持できるのかなど多くの課題に直面し先の見えない運営を手探り状態で行っていたことを思い出します。この頃、県外被災地では全国のPTAが次々と支援に駆けつけるのにどうして福島県には来てくれないのか。もしかしたら福島県の実情を知らないのではないか。現状を伝えるために、震災から1ヶ月経った4月上旬に、日本PTA全国協議会の会議が行われる京都市へ車で10時間掛けて向かいました。そして福島県の現状を訴えました。その後、次々と全国のPTAをはじめ多くの方々の支援などを頂きました。そのおかげで今の福島県PTA連合会があるのだと思います。

震災直後に私は会長として司令塔であると同時に、広告塔になることを決意しました。当時は出来るか出来ないかを議論することよりも、やるかやらないかの2つの選択肢しかありませんでした。私自身、震災直後から県内の学校を訪問し状況を把握することから始まり、県内外の避難所へも幾度となく顔を出して子どもたちの様子をみながら、保護者の皆さんから様々な意見や要望を聞いて廻りました。そして私たちPTAは何をすべきかを考え、活動の柱を明確にすることから始めました。それは原点に戻り子どもたちの権利である「生きる権利」「育つ権利」「学ぶ権利」の3つの権利を私たちの義務に置き換えることでした。この3つの義務を基本に、機能不全に陥っているPTAもある中で本連合会として出来る最大限の知恵と労力を費やしました。もちろん関係省庁へも行き、様々な意見や要望を行いました。多くの活動を行う中で「心のケア」と「教育」の2点を重点項目に据え、それが今日の活動につながる主要な事業となっています。私は今もこの3つの権利に基づく活動は間違いではなかったと思っています。PTAの役割、それは家庭教育はもちろん、学校教育や行政ではできない隙間を埋めることだと思います。以前より私が言い続けてきたことに「責任ある保護者としてプロの教師として、更にはより良い地域社会の一員として義務と役割を果たすこと。ここに行政が共に手を携えることで子どもたちは成長する。4者の融合と連携なくして子どもたちの未来はない」という思いがあります。震災から5年が経ち、改めて私たちPTAの役割を考えた時に、それは愛してやまない子どもたちの将来への環境整備です。何があっても守るべきは子どもたちです。

3 おわりに

改めて尊い命を亡くされました方々に衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。また避難先で不自由な生活を余儀なくされています皆様にお見舞いを申し上げます。5年経った今でも多くの課題が山積している福島県ですが、いつまでも下を向いてばかりはいられません。やっもらうばかりではなく、自分たちで考え行動することが大切であり、この姿を子どもたちに見せることが私たちの目指している復興と郷土愛につながっていると思っています。PTAがその一助になれば幸いです。

あの時の記憶、そして輝く未来へ

白河市立白河第二小学校 教諭 根本 義 浩

1 あの時の記憶

年度末を控えた週末の金曜日。2年生の子どもたちは教室で机の中の整理をしていた。そのとき、突然、携帯の地震速報のアラームが鳴ると同時に、地の底からわき上がるような地鳴りとともに激しい揺れが教室を襲ってきた。とても長い時間を感じた。廊下からは水が流れ落ちる音が聞こえてきていた。強い揺れが収まり、校庭へ避難しようと子どもたちが並んでいるとき、またも横揺れが襲ってきた。姿勢を低くして収まるのを待ち廊下へ出ると、階段の上階から落ちてくる水が足下を川のように流れていた。後からわかったことだが、屋上のタンクに水を引き上げる揚水パイプが外れてしまった為に、水が流れ出ているのだ。全員が無事に避難した後も、何度となくやってくる揺れに子どもたちも怯え泣き出す子もいた。校舎の新築工事にもない、校庭の木々が伐採され、冷たい風が吹き付けていた。時折襲ってくる揺れの中、子どもたちのジャンパーやコートを取りに、職員は校舎内に戻っていった。子どもたちを心配し、校庭に集まった保護者の情報をもとに、下校への対応が協議された。

しかし、このときもう1つの悲しい事故が発生していた。4月に入学してくるはずだった女の子が、白河市内で発生した土砂崩れに巻き込まれ亡くなっていたのだ。1か月前の一日入学に元気な姿を見せていたのに…。

2 子どもたちのために今できることを

学校行事も活動時間を制限したり、内容を変更したりしながら進められた。4月の遠足でも屋内や屋根のある昼食場所を確保するため連絡にあたった。毎年恒例の運動会は校舎改築の影響で白河二中の校庭を使つての開催と決まっていたが、砂埃を押さえるように競技内容を工夫したり、ブルーシートの上で演技したりするようにした。PTAの奉仕作業では、少しでも校地内の線量を下げないように、校舎外壁の洗浄や表土の除去、側溝の土上げと洗浄が行われた。全身をカッパや防護服、マスクを身につけた完全装備での作業になった。また、毎日の登下校時のことも考え、通学路の安全点検とともに、放射線量の測定も行われ、できるだけ被曝線量が少なくなるように通学路を変更した班もあった。窓を開けることも躊躇され、夏の暑さ対策として扇風機が用意された。



ブルーシートの上で玉入れ



奉仕作業：除染作業

未だかつて経験したことのない生活圏内での目に見えない放射線との戦いの中、学校と保護者、地域はできうる限りの情報を集め、協議し、目の前の子どもたちのために「今できること」を合い言葉に、全力で取り組んできた。

3 輝く未来のために

震災から5年が経ち、徐々に日常を取り戻すことができている人も多い反面、仮設住宅で暮らしたり、避難生活を続けたりしている人、さらには仮設校舎で授業を続けている子どもたちもいる。まだまだ、先が見えないことも多いが、あの日から学校や地域の大人たちが続けているように、目の前の現実をしっかりと捉え、自分たちが今できることを判断し、一歩でも前に進む努力を続けていきたい。

震災から学んだこと

小野町立小野新町小学校 教諭 吉田 美郁
(震災当時 いわき市立磐崎小学校勤務)

1 はじめに

本校は「自ら学び、心豊かで、たくましい子どもの育成」を目標に掲げ、教育活動に取り組んでいる。今年度は5年生において震災前に行っていた米作り・収穫祭を再開し、これまで通りの学校生活に戻りつつあるところである。

2 震災当時

震災当時、私はいわき市立磐崎小学校に勤務し、6年生の担任だった。卒業式を控えたあの日体育館では式場作りが行われていた。そんな中、私は教室で6年生と帰りの会をしていた最中。3階だったその教室は大きく大きく揺れた。子どもたちからは悲鳴が上がり、教室内はパニックに。揺れが少し収まったところで、安全を確認しながら無我夢中で子どもたちと階段を駆け下り、校庭に避難したことを今でも鮮明に覚えている。「怖い。」という子ども。泣きじゃくる子ども。不安で仕方がなかったのだろう。本当は自分も同じ気持ちだったが、その気持ちを抑え、「大丈夫、大丈夫。」子どもたちにそう声をかけた。

それからの生活は一変した。2週間後に控えていた卒業式。もうできないだろうと思っていた。しかし、一生に一度の式を何とか行ってやりたいと考え、卒業式を決行することになった。4月6日の午後。中学校の入学式を終え、中学校の制服を着た子どもたちが小学校に集まった。子どもたちと保護者、教職員、そして、当時体育館に避難していた方々。避難していた方々に事情を話し、体育館を半分貸していただいた。それはどんな卒業式よりも忘れられない卒業式となった。

3 今、そして輝く未来の子どもたちへ

現在、私は3年生の担任をしている。子どもたちは、外遊びをし、今までと何一つ変わらない生活を送っている。その頃5歳だった子どもたちに当時のことを聞くと、何となくしか覚えていない。だからこれから先、防災教育や放射線教育を継続的に行っていくのはもちろんだが、この震災で学んだことや当たり前のことが当たり前でできるありがたさを、これからの未来を創っていくこの子どもたちに伝えていかなければならないと思っている。

そして、もう1つ。震災の時、自分自身が嬉しかったのは、電気がつくことや水が出るだけでなく、「温かい言葉」をかけてもらったことである。「よくがんばったね。」「何か手伝えることがあったら言ってね。」これらの言葉にどれだけ救われたか。言葉は人を簡単に傷つけることもできるし、救うこともできる。その「言葉の大切さ」を私は子どもたちに伝えていきたいとも考えている。

私はいつも子どもたちに「失敗は成功のもと」ということわざを話している。失敗してもいいからたくさん進んでチャレンジしてほしい。今は今しかないのだから、生きている一瞬一瞬を大切にしてほしいと願っている。

4 おわりに

「うちの子、本当に学校が楽しくてしょうがないみたいです。夏休みや冬休みは友だちや先生に会えないからいらないんですって。」

これは教育相談の時に、ある保護者から言われた一言である。学校が何よりも楽しいと思ってくれることが、私にとって一番のやりがいである。

ふるさと浪江町

浪江町立浪江中学校 教頭 井戸川 浩
(平成27年度まで兼務校 南相馬市立鹿島小学校)
(震災当時 浪江町立大堀小学校勤務)

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故により、臨時休業となってから早5年が過ぎようとしている。児童は全員が福島県内はもとより日本全国各地の学校に区域外就学をしている。学校再開のめどは立っていない。

1 はじめに

大堀小学校は双葉郡浪江町の西部に位置し、明治6年創立の大堀地区唯一の学校である。学区内には若鮎踊る清流で知られる高瀬川や、馬の絵とひびの入った模様で有名な大堀相馬焼がある。また、保護者はもちろん、地域を挙げて学校を支援する体制が整っており、自然と歴史が融合した風光明媚な地区にある。

2 学校再開に向けて

浪江町には小学校6校、中学校3校があり、児童生徒約1,800名が在籍していた。東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故の影響で、すべての学校が臨時休業に追い込まれ、子どもたちはそれぞれの避難先の学校に区域外就学をすることになった。私が当時勤務していた兼務校にも、浪江町から多くの児童が通学していた。全校児童約100名のうち、浪江町からの避難児童が全校生の3分の1を占めたのだから、先生方の苦労は計り知れなかつたろう。しかし、校長先生はじめ先生方、地域の方々には物心両面にわたり温かく迎えていただいた。

その後、平成23年8月に同じ町内の浪江小学校・中学校が、二本松市内の開校になった校舎を借り受け再開した。また、平成26年4月には津島小学校が浪江小学校併置という形で再開した。浪江町内の児童はだれでも受け入れるということで、大堀小児童も数名在籍している。また、「ふるさとなみえ科」としてふるさと浪江町の伝統や文化、自然を受け継ぎ、発信していくなど様々な学習を展開している。

平成26年7月に、臨時休業以降初めての「大堀小のつどい」を開催した。震災当時の1年生から6年生はもちろん、大堀小を卒業した中学生、現在区域外就学をしている1年生から4年生とその保護者に参加を呼びかけた。子ども、保護者、教職員合わせて約90名ほどの参加だったが、子どもたちの笑顔や元気な姿を見ることができた。

3 おわりに

大堀小学区は、帰還困難区域と居住制限区域に分類されている。現在校舎の除染と校庭の表土をはぐ作業が行われているが、本来の校舎に戻って教育活動を再開することは多くの課題があり、そう簡単ではない。また、本来の校舎で勉強したり運動したりしたことがある児童も、平成27年度には、卒業してしまう。

浪江町では、将来の帰町に向け様々な取り組みをしている。その中で、町東部の中学校を拠点として教育活動を再開する構想がある。さらにいつの日か大堀小学校の校舎に子どもたちの元気な声が響き渡る日まで、学校を守っていきたい。



大堀小のつどい



除染中の大堀小学校

伝えたい

東北お遍路理事（ボランティア） 村上 美保子
（現在 新地町在住）

震災以前は、相馬郡新地町で朝日旅館を経営していた。
東日本大震災の津波で、旅館、自宅を失う。その後は、震災から学んだことを伝承すべく「東北お遍路プロジェクト」に参加し、活動を続けている。

東日本大震災の津波に、すべてを奪われた。旅館や自宅はもちろんのこと、友人や隣人まで。あまりの出来事に、しばらくは現実を受け入れられなかった。明日、目が覚めたら自宅にいるようにと願いながら寝た。けれど、目を覚ますと夢ではなく、やはり避難所に寝ていて、布団の中で涙したことを思い出す。

小学校時代を岩手県三陸海岸近くで過ごした私は、学校の先生から「大きな地震の時は、必ず津波が来るから、海から少しでも遠くに、少しでも高い所に逃げなさい。津波は、あつという間に押し寄せるから、他人のことをかまっている暇はありません。津波でんでんこです。一人で逃げなさい。一人一人が自分の命を守ったら、死ぬ人は出ません。」と、教えられて育った。

一方で、夫は、新地町には津波が来たことが無いと信じていて、避難を渋った。夫を引きずるようにして避難したから2人の命が助かった。亡くなった多くの方々は、夫と同じように、津波が来ないと信じて避難しなかったと想像する。

だが、過去には、新地町でも、今回同様の巨大津波があった。貞観の大津波（869年）や慶長の大津波（1611年）だ。新地町には、「舟輪（ふなわ）」とか「小鯨（こくじら）」という、津波に由来する地名さえ残っているのに、長年、津波は来ないと信じられていたのだ。

歴史には、「もしも」はないという。しかし、もしも、過去に新地町でも大きな津波が来たと語り継がれ、伝承されていたなら、多くの命が助かったのにと、残念でたまらない。

2011年9月から、友人が立ち上げた「東北お遍路プロジェクト」に参加している。被災地を巡礼してもらうことで交流人口を増やし、復興に拍車をかける目的がある。宗教団体ではないので、巡礼ポイントは、津波被災にまつわる話がある場所になっている。1000年先まで語り継ぎたいストーリーがある場所がポイントになっている。すでに69か所が決定し地図になって道の駅などに置いてある。パソコンやスマートフォンでも検索できるようになった。これから先ずっと、お遍路道と、ポイントのストーリーが残れば、被災の風化を防止できる。巨大津波のことを伝承してゆける。

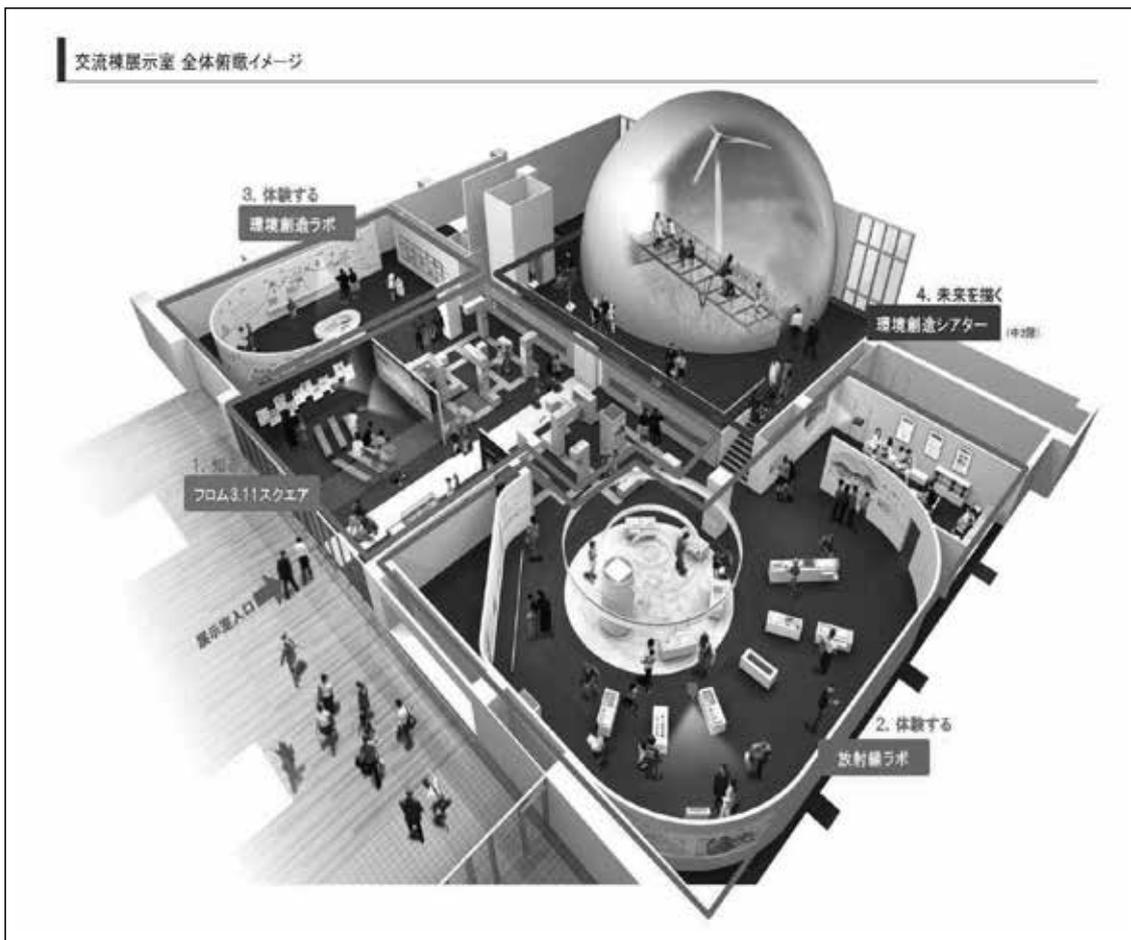
人間は忘れやすい動物である。きっと100年もすれば、今回のことも忘れて、油断するかもしれない。その為にも、10年ぐらいかけて、お遍路のポイントを100か所ぐらいに増やして行く予定だ。

私は、伝承こそが最大の防災だと考えている。小学生の時先生に教えてもらったから、いち早く避難して命が助かった。今度は、私が伝えていきたい。その思いから、紙芝居やブログなどを使って、発信をしている。命が助かったことに意味があるとすれば、伝える使命があるからと、勝手に思っている。被災して多くの物を失い、一時は落ち込んだが、多くの人に支援や応援をいただき、立ち上がった。多くの縁や絆が結ばれた。命の重み、生きていることの素晴らしさ、感謝の気持ちなど、学んだことや得たこともたいへん多かった。失ったものと得たものを天秤にかけたら、得たものの方がずっと多い。そのことを肝に銘じて、これからも活動を続けていきたい。

福島県環境創造センター交流棟（愛称：コミュタン福島）

住 所 〒963-7700
 福島県田村郡三春町深作10番2号（田村西部工業団地内）
 電 話 0247-61-6111
 F a x 0247-61-6119

コミュタン福島は、子どもたち、県民とともに福島の未来を創造する“対話と共創の場”です。放射線に関する展示や体験プログラムを通して、放射線や環境問題を身近な視点から正しく知るとともに、県民がそれぞれの立場から福島の未来を考え、創り、発信するきっかけとなる場をめざしています。（福島県のホームページより）



<これまでの経過>

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 平成24年10月 | 環境創造センター基本構想策定 |
| 〃 12月 | 福島県とIAEAとの間の協力に関する覚書に署名 |
| 平成26年3月 | 三春町施設本館及び南相馬市施設着工 |
| 〃 10月 | 〃 研究棟及び交流棟着工 |
| 平成27年2月 | 環境創造センター中長期取組方針策定 |
| 〃 4月 | 日本原子力研究開発機構・国立環境研究所との基本協定締結 |
| 〃 10月 | 環境創造センター本館開所式 |
| 〃 11月 | 環境放射線センター開所式 |
| 平成28年7月 | 環境創造センター交流棟開所式（コミュタン福島 オープン！） |

※IAEA：国際原子力機関